

六^あっ^つ 連^ん 銭^{せん}

平成13年12月

〒381-1231 長野市松代町松代4-1(真田宝物館)



海津大絵図・部分(年不詳) 三村養益筆

松代城下を中心として、善光寺、屋代、稲荷山宿などが描かれている。特に城下の待屋敷が克明に描かれ、カワがどのように流れていたのかなど、詳細を知ることができる。

松代藩の御用絵師たち

……三村家・高川文筆・青木雪卿……

真田家伝来の大名道具のなかには、松代藩に仕え絵画御用を勤めた、いわゆる御用絵師による作品が数多く伝えられています。

それら数々の作品や記録などから、絵師の仕事とはどのようなものであったのかを垣間みることが出来ます。城などの普請にかかわる障壁画製作や修理、屏風などの婚礼調度の製作、贈答品や家臣へ与える絵の書き溜め、藩主などの前で描く席画、それに古画の模写や藩主やその子女の手本の製作など、実にさまざまな仕事がありました。

今回は江戸後期に活躍した4人の絵師、三村養益ようえき・三村晴山せいざん・高川文筆ぶんせん・青木雪卿せつけいを取り上げました。同じ藩に仕えた絵師でありながら、その経歴、生きざま、作風はみなそれぞれです。4人の人物像とともに、真田家に伝えられた作品のなかからいくつかを紹介します。



三老之図 三村晴山筆・佐藤一斎賛

江戸後期の儒学者である佐藤一斎の賛があり、その年号から文政11年(1828)頃の作品と考えられる。佐藤一斎は佐久間象山の師としても知られ、松代藩との関わりが注目される。

三村養益とその作品

三村養益は三村二郎平の子として宝暦9年(1759)に生まれ、幼名を力三郎と言いました。父・二郎平は自閑斎と号し、松代藩の評定所絵図書を勤めたといわれています。

後に養益は、幕府の御抱絵師である木挽町狩野家7代養川院惟信に学び、松代藩の御用絵師となっています。養益の「養」は、師匠である養川院の一字を賜ったものといわれています。諱は惟芳と言いました。

当館所蔵の養益の作品には、養益75歳のときの作品である「関ヶ原合戦絵巻」や琴・碁・書・画の四芸を描いた六曲二双の「琴棋書画之図屏風」なども伝えられています。「律義なる画」と評されたと伝えられるように、丁寧な描写が印象的です。

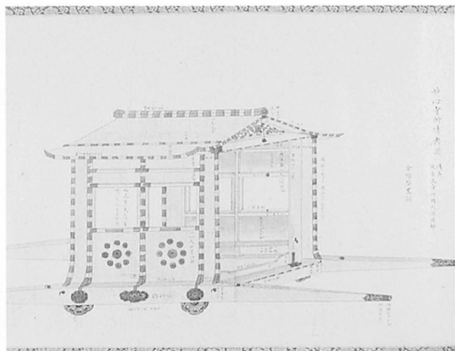
三村晴山とその作品

三村晴山は寛政12年(1800)、御用絵師・三村養益の子として生まれ、幼名を金斎と言いました。12歳で江戸に出て木挽町狩野家での修行に入り、2年後の14歳のときには、藩主・幸専の前で席画を行うまでになっています。

文化14年(1817)、18歳で松代藩の御用絵師になりました。しかし、その師匠であった狩野家8代伊川院・9代晴川院の願いにより、江戸にとどまって幕府の絵画御用の手伝いを行うなど、晴山の活動の中心は江戸であり、しかも狩野家での仕事を精力的に行っていたことがうかがえます。

また、晴山は絵師としての仕事以外に、水戸の徳川斉昭や薩摩の島津斉彬とも通じ、政治的な任務も果たしたと言われています。

安政5年(1858)、59歳で亡くなっていますが、藩主・幸貫に信望のあった晴山の作品は比較的多く伝えられており、その活躍ぶりをうかがい知ることができます。



輿車図考 松平定信筆写 付図 高川文釜模写

松平定信の編集した輿車図考の付録図として文釜が模写したもの。さまざまな乗り物が描かれている。天皇の乗り物である鳳輦・葱花輦はその添え書きから東大寺や妙心寺所蔵のものを模写したことがわかる。



八丈島図巻 (模写) 弘化4年 (1847) 高川文釜筆

渡辺華山の弟子・永村茜山の「伊豆七島図巻」を模写したもの。大島・八丈島・神津島・三宅島など島々の風景や風俗、産物を描いている。

高川文釜は、武蔵国(現・埼玉県)所沢の三上庄兵衛の次男として生まれました。名を森嶺、諱を惟文といい、後に松代藩の御側医師である高川泰順の娘と結婚して、泰順の婿養子となっています。

江戸後期の大家家として知られる谷文晁の画塾「写山楼」で、渡辺華山や文晁の養子の文二や実子の文三など、多くの有名な人物とともに学んでいます。

嘉永7年(1854)ペリー来航のときに、横浜の応接場に医師として同席し、その風景を描いたことでもたいへん有名です。

高川文釜とその作品



獅子之図 三村晴山筆・勝海舟賛

唐獅子は狩野派絵師が好んで描いた画題であるという。勝海舟の賛が添えられており、晴山が政治的な役目をも果たした背景をうかがい知ることのできる作品。

青木雪卿とその作品

文化元年(1804)埴科郡岩野村(現・長野市松代町岩野)に生まれています。通称を八重八、諱を重明、号を雪卿としました。川中島村の更級雄斎に絵を学んだと伝えられていますが、その雄斎について詳しくはわかりません。

8代藩主幸貫の信頼を得て多くの絵の制作を命じられ、嘉永2年(1849)には藩の御用絵師となっています。その後、善光寺地震後の領内巡視の風景記録である「感応公丁未震災後封内御巡視之図」を描きあげています。写実的な描写にすぐれ雪卿の代表作と言えます。

また地元松代には、岩野の地藏堂の漁藍観音像(彫像)や梅翁院の天女と龍の欄間絵などが伝えられています。

晩年まで絵を描き続け、明治36年(1903)100歳で亡くなっています。

(文責・北村典子)



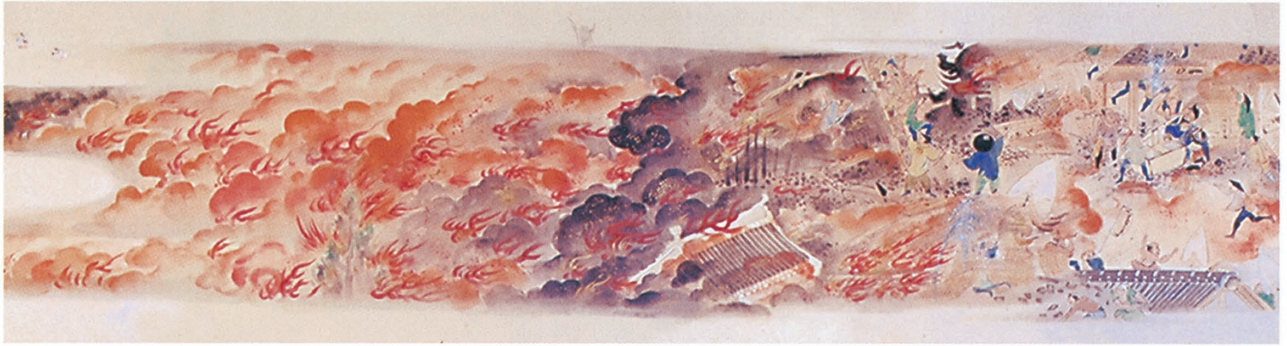
楓図 青木雪卿筆

風景画や人物像が多い雪卿の作品のなかにあつては貴重な花木図である。金砂子(金箔の粉末)が吹き付けられている。



唐美人図 明治初期 青木雪卿筆

姿見鏡衛立の覆いに描かれたもの。雪卿70歳のときの作品。絹地に唐美人絵が色彩豊かに描かれている。



よじんしゃせいず
余燼写勢図 三村晴山筆

火事の発見から避難、消火活動、鎮火、片づけと一連の火事場の状況を描いたもので、模写されたものである。もう一点、「惣後の巻」と名付けられた同一図柄の作品も伝えられる。



松代天王祭礼図巻 三村晴山筆

松代城下の大祭の様子を時間の経過に沿って描いている。各町ごとに山車がでて大変にぎわいである。民家の2階には多くの見物人が描かれ、町屋の様子もうかがい知ることができる。



世界人物録図巻（模写） 嘉永4年（1851）高川文笠筆

世界40の国の人々を描いている。古くから世界諸国人物図が描かれてきたが、そういったものを模写したもの。



米利堅使人等写真図 嘉永7年 高川文笠筆

嘉永7年（1854）のペリー来航のとき応接場に医師として加わり、その時の写生をもとに描いたものと考えられる。ペリーのほか副使アダムスらが描かれる。